

●書学書道史学会

会 報

第 39 号

令和2年(2020)5月15日発行

編集・発行

書学書道史学会

会報編集委員会

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 9F

(株) 毎日学術フォーラム内

TEL (03)6267-4550

FAX (03)6267-4555

MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

理事長再任にあたって

中村 伸夫

このたびの役員改選の結果、引きつづき2年間、本学会の理事長を務めることになりました。はじめて理事長の重責を担うことになった2年前は、まばゆい陽光の下、社会はいつもの活気に満ちあふれていました。しかし、この春は、新緑の美しい輝きと、過酷な人間社会の現実との、あまりに大きな落差を思うばかりです。感染症の猛威が人の世をむしばみ、人間界が自然界と分離してしまったように思えてなりません。

通常とは異なる社会情勢の中で、私にとつては再度の本学会のかじ取り役の仕事がはじまりました。任が重すぎることは私自身が承知しているところですが、会員の皆様の更なるご支援とご協力をいただきながら、何とか責務を果たすべく微力を尽くす所存です。

学会創設30周年を迎えた昨年、記念大会が東京国立博物館で開催されました。「而立を迎えた書学書道史学会では、来し方を顧み行く末に思いを馳せながら、惑うことなく着実な一歩を重ねてゆきたいと思います。」これは記念大会を総括した富田淳副理事長による「会報」第38号掲載の巻頭言をしめくくる一節です。この言葉の通り、これまでの30年の歩みを踏まえ、新たな時代にふさわしい活動の推進と成果の積み重ねが私たちには求めら

れています。

昨秋、元理事長の興膳宏京都大学名誉教授が文化功労者になられ、また、元副理事長の杉村邦彦京都教育大学名誉教授が瑞宝中綬章をご受章されました。言うまでもなく、両先生は30年前の学会創設時の中核メンバーであり、今日に至るまで長きにわたって本学会の発展に大きく貢献されてきました。この慶事はわれわれ会員にとつてもこの上ない喜びです。改めてお祝いを申し上げる次第です。

今回の第16期役員については、全22名のうちの9名が、それぞれ新たに常任理事・理事・監事に就任され、しかもこれまで以上に若い年齢層の方々が数多く役員の構成員として加わるようになりました。新役員の方々には、将来に向けての学会運営の強力な牽引者となつていただきたく思います。そのためにもまず、この2年の間に、学術の発展向上を図るという本来的な任務の推進のために、組織体制を今一度見直し、運営の明瞭化と効率化を実現しなければならないと考えています。

国内局からの報告にもある通り、感染症の拡大がつづく現今の状況に鑑み、今秋開催を予定していた盛岡大学での大会は中止することになりました。大会開催のための例年通りの事前準備につき、順序をふまえて円滑にこれを進めることは困難であると思われ、理事長提案にもとづき常任理事会(メール審議)で協議し、決定したところです。異例の対応となりましたが、第31回となる盛岡大学での大会は、次年度の同時期にスライドして開催する予定です。

第16期の学会運営は、例年とは異なる特別の社会情勢の中ではじまりました。例年であれば、今ごろは部局ごとに関係者が集まり、意見交換を交えた引継ぎを行い、盤石の準備が整う時期にあります。しかし、今はまだ通常の活動を行える状況ではないように思われます。当面の間は、メール等での連絡や打ち合せを密にすることで、運営に支障が生じないよう、相互に努めるほかはなさそうです。各位のご協力を切に願ひする次第です。

(本会理事長)

第31回書学書道史学会大会延期のお知らせ

国内局

令和2年10月31日より11月1日にかけて盛岡大学にて開催を予定しておりました第31回書学書道史学会大会は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況に鑑み、来年度秋季に延期いたします。詳細は、次号以降の会報、また学会ホームページでお知らせいたします。

第31回書学書道史学会総会の扱いについて

事務局

国内局からの報告にもある通り、今秋、盛岡大学での開催を予定していましたが第31回書学書道史学会大会は、来年度秋季に延期することになりました。このことに伴い、大会初日に予定していました通常の総会も開催することができません。「書学書道史学会会則」第24条には、「総会は年一回大会に併せて開催し、本会の運営に関する重要事項を決定する。」と規定されているところですが、本年度は以下の代替方法により、例年行われている議事・報告に代えることといたします。異例の対応となりますが、どうかご理解とご協力をお願いいたします。

◆代替方法

令和2年10月開催予定の定例理事会の議事内容をふまえ、全会員宛に事務局から、議事次第、審議と報告のための各種書類、賛否記入のための郵便ハガキを送付し、指定期限内に届いた返信の3分の2が賛成の場合は、審議事項につき承認が得られたものとして扱うこととします。結果は「会報」第40号で報告いたします。全会員宛に送付するのは、以下の通りです。

(1) 議事次第

(2) 審議のための書類

- ① 令和元年度会計決算報告書(案)
- ② 令和元年度事業活動報告書(案)
- ③ 令和元年度会計監査報告書(案)

大会で口頭発表を課している研究促進助成金採択者の扱いについて 研究局

「研究促進助成金制度」採択者は、「研究促進助成金規程」において、交付年度翌々年の大会で口頭発表を行うことが義務付けられています。本年大会で口頭発表が課されていた該当者においては、大会が延期されるため、来年度予定の第31回大会にて行うようお願いいたします。

④ 令和2年度会計予算(案)

⑤ 令和2年度事業活動計画(案)

(3) 報告のための書類

国内局・国際局・学術局・研究局・編集局・事務局・会報編集委員会の各局(委員会)が作成した報告書(600字程度)ならびに関連資料(必要な場合)。

第16期役員・幹事・諮問委員・選挙管理委員一覧(※は新任)

〔役員〕

〔理事長〕

中村伸夫(元筑波大学教授)

〔副理事長〕

河内利治(大東文化大学教授)

富田 淳(九州国立博物館副館長)

〔常任理事〕

※尾川明穂(筑波大学准教授)

笠嶋忠幸(出光美術館学芸課長)

菅野智明(筑波大学教授)

※鍋島稲子(台東区立書道博物館主任研究員)

※橋本貴朗(國學院大学准教授)

森岡 隆(筑波大学教授)

※矢野千載(盛岡大学教授)

研究局長

国際局長

副事務局長・会報編集委員長

国内局長

編集局長

副国内局長

事務局長

学術局長

副学術局長

第16期役員選挙について

選挙管理委員会

◆役員選挙の経過と結果

本学会選挙管理委員会は、第15期役員任期満了にともない、「選挙管理規定」に基づいて令和2年2月21日を投票締切日と定め、郵送による第16期役員選挙を実施しました。

開票作業は2月24日、杉浦妙子選挙管理委員長指示のもと、選挙管理委員により大東文化会館会議室において実施されました。投票状況については、投票有権者数474票のうち、有効投票数74票・投票率16%（平成30年度・70票・投票率14%、平成28年度・80票・15%、平成26年度・106票・21%、平成24年・65票、平成22年・47票、平成20年・61票、平成18年・92票）でした。開票結果を受け、同規程第6条により、以下の通り選挙選出理事10名、監事2名を当選者として確定しました。但し、当選理事の小川博章氏、福田哲之氏の辞退により、森岡隆氏、横田恭三氏が繰り上げ当選となり、横田氏の辞退により矢野千載氏が繰り上げ当選となりました。

【選挙選出理事】（五十音順）

尾川明穂 笠嶋忠幸 河内利治 菅野智明 富田 淳

中村伸夫 鍋島稲子 橋本貴朗 森岡 隆 矢野千載

【監事】（五十音順）

増田知之 柳田さやか

◆第16期役員会等発足

第16期役員選挙の開票、当選者決定を受け、令和2年3月9日に選挙選出理事による緊急懇談会（メール協議）を開催し、理事長の互選と理事長指名理事10名を選出しました。これに続き3月26日に開催された臨時理事会（メール審議）において、各事業部局の分掌、諮問委員、選挙管理委員会委員を以下の通り決定し、第16期役員会等が発足しました。今期の役員・幹事・諮問委員・選挙管理委員の任期は、令和2年4月1日から令和4年3月31日までです。

【理事】

小川博章（淑徳大学教授）

副事務局長・会報編集副委員長

萱のり子（東京学芸大学教授）

副国内局長

※下田章平（相模女子大学専任講師）

副国際局長

鈴木晴彦（元日本大学教授）

副研究局長

高橋利郎（大東文化大学教授）

副編集局長

※高橋佑太（二松学舎大学専任講師）

副学術局長

※成田健太郎（京都大学准教授）

副編集局長

福田哲之（島根大学教授）

副研究局長

弓野隆之（大阪市立美術館学芸課長）

副国際局長

横田恭三（跡見学園女子大学教授）

副国内局長

【監事】

※増田知之（安田女子大学准教授）

※柳田さやか（東京藝術大学助手）

【幹事】

国内局 川畑 薫 丸山猶計 山口恭子

国際局 佐々木佑記 六人部克典

学術局 ※金 貴粉 ※峯岸佳葉

研究局 権田瞬一 角田健一

編集局 ※井田明宏 ※正岡知晃

事務局 金子 馨 亀田絵里香 野中直之 藤森大雅

【諮問委員】

安達直哉 ※大野修作 大橋修一 押木秀樹 ※柿木原くみ

澤田雅弘 ※下野健児 神野雄二 ※杉浦妙子 高木厚人

※永由徳夫 名児耶明 信廣友江 宮崎洋一

【選挙管理委員会】

委員長 小川博章

委員 ※下田章平 ※橋本貴朗 ※柳田さやか

亀澤孝幸 野中直之

（以上、理事・監事・幹事より4名）
（以上、会員枠より2名）

各局報告

◆国内局

諸般の社会情勢を鑑み、本年度の大会開催を見送ることとなりました。理事長はじめ役員一同、苦渋の決断に至りましたが、ご発表を検討されていました方々には、どうかご理解下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお次年度の開催に向けて、引き続き準備を進めて参ります。新たな開催日程につきましては、決まり次第、ご案内申し上げます。

(局長 笠嶋忠幸)

◆国際局

令和元年に開催された第30回の大会では、中国書法家協会主席の蘇士澍氏より、近百年の日中書法交流に関するご講演をいただきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、政府は4月7日、特別措置法に基づく緊急事態宣言を発令、国際間の人的交流は困難な時期を迎えています。国際局では今後の動向を注視しながら、学会ホームページなどを通して、中国大陸・台湾などにおける最新の書学の状況を少しでもお伝えできればと考えています。

(局長 富田 淳)

◆学術局

学会誌29号のJ-STAGE登載

令和元年10月31日刊行の『書学書道史研究』29号を3か月後の1月31日にJ-STAGEで公開し、即日、本学会のホームページでお知らせしました。

WEB「学会名鑑」実態調査回答と結果公表

内閣府日本学術会議事務局から協力学術研究団体に対する令和元年度実態調査に回答し、3月3日に「学会名鑑」でその結果が反映されたところ

でしたが、4月に本学会が新体制となったことを受け、再修正いたしました。その他

独立行政法人科学技術振興機構から連年です「J-STAGE 利用機関・意向・満足度等アンケート」などに局内で語りつつ回答し、日本学術会議事務局からの会長意識調査には理事長から回答していただきました。今後も滞りなく務めを果たしてまいります。

(局長 森岡 隆)



J-STAGE『書学書道史研究』「巻号一覧」画面
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/shogakushodoshi/list-char/ja>
 既刊号の検索が可能です



書学書道史学会ホームページ トップ画面
<http://shogaku-shodoshu.org/>
 右上に J-STAGE へのリンクがあります



注目トピックス



My J-STAGEにサインイン

すべてのジャーナルを閲覧する
 すべての分野を閲覧する
 すべての発行機能を確認する

最新情報

2020年4月1日
 J-STAGE利用規約（発行機関間）

J-STAGEトップ画面
 他の学協会誌からの検索が可能です

◆研究局

「研究促進助成金制度」による2020年度研究計画を募集いたします。奮ってご応募ください。詳細は「研究促進助成金制度／2020年度募集要項」と「2020年度書学書道史学会『研究促進助成金制度』応募研究計画書」をホームページに掲載しておりますので、一読ください。

■研究期間：令和2年9月1日～令和4年8月31日の2年間

■研究促進助成金：一件につき30万円（3件まで採択）

■申請受付期間：令和2年6月1日（月）～6月7日（日）

■申請方法：ホームページ掲載「2020年度書学書道史学会「研究促進助成金制度」応募研究計画書（Word形式）をダウンロードし、受付期間内に下記問い合わせ先までEメール（添付ファイル）で申請して下さい。

■問い合わせ先：maf-syogaku@nynavi.jp

■問い合わせ方法：Eメールのみ（2020年度研究助成問い合わせ）と（記入下さい。）

令和2・3年度の研究局は、2・3ページ記載の5名で運営して参ります。前副局長永由徳夫先生は諮問委員に、替わりに鈴木晴彦先生が新副局長に就任されました。研究局に関するご意見がございましたら、上記問い合わせ先か局員までご連絡ください。

（局長 河内利治）

◆編集局

今年度の編集局の陣容は、先掲のとおりです。昨年度に引き続き、学会誌の編集業務を中心に、鋭意努めてまいります。節目となる学会誌第30号は、昨年度の大会の記念講演やシンポジウム、招待発表等の内容も収載する予定です。学会誌への論文投稿は、学会サイトに掲げる投稿規定を熟読

の上、遺漏なきようご対応願います。投稿は紙媒体の郵送とし、Eメールを用いないよう、特にご留意ください。例年、大会発表者以外の投稿には、事前に論文要旨の提出をお願いしておりますが、今年度は大会の中止という異例の事態となりました。従いまして第31号へ投稿をお考えの向きには、本年12月末までに論文要旨をご提出願います。

（局長 菅野智明）

◆事務局

令和2年度事業・活動計画（案）

本来ならば総会で承認を得るべきものですが、現段階でのおおよその予定としてここに提示いたします。変更等の可能性もありますので、ご留意願います。また、常任理事会・理事会は、状況によりメール会議となる場合もあります。

4月12日 令和2年度第1回常任理事会（メール会議）

4月23日 令和2年度第1回理事会（メール会議）

（以上は執行済み）

5月15日 第39号《会報》発行及び発送

6月上旬 「研究促進助成金制度」申請受付

6月中旬 令和元年度決算会計監査

6月下旬 令和2年度第2回常任理事会（会場未定）

10月下旬 令和2年度定例理事会（会場未定）

令和2年度総会（書類送付による審議）

10月31日 第30号『書学書道史研究』発行及び発送

12月31日 第31号『書学書道史研究』投稿申込締切

1月15日 第40号《会報》発行及び発送

3月31日 第31号『書学書道史研究』投稿原稿締切

（局長 橋本貴朗）

事務局よりお願い

事務局

◆年会費について

本号に年会費納入用の郵便振替用紙が同封されています。年会費は、6月30日までに納入ください。なお、令和2年3月現在、会費を滞納している方には、本年度分に滞納年度分を加算した金額が記載されております。速やかに全額をご納入ください。

また、3年以上滞納の方は、すでに導入されている「長期会費滞納者の自動退会（除籍）制」の適用対象となります。ただし、退会（除籍）適用対象者となった場合であっても、退会届提出の年度分までの合算額における学会費の請求権は消滅しません。本件に関して、会員台帳別表にて管理の上、適宜納入請求を続けることが総会にて決定されていますので、予めご了承ください。

◆学生会員の「会員変更手続き」について

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は学生会員（学生会費適用の方）が大学院を修了、または満期退学・中途退学、その他の理由により学籍を失った時（学生証の発給対象でなくなった時）に、「学生会員資格終了」とするものです。該当の方で、引き続き一般会員として留まる場合、会員変更手続き（「会員変更申込書」の提出）が必要です。とりわけ、今春に学生会員資格を失った方は、ご注意ください。「会員変更申込書」は、学会ホームページからダウンロードできます。会員変更手続きにより、自動的に一般会員資格が付与されます。

なお、「会員変更申込書」下の「紹介会員氏名」「役員推薦氏名」「理事会承認」各欄は記入不要です。「会員変更手続き」を含め、その他の問合せや書類送付先は、本会報一面の事務局（株）毎日学術フォーラム内Eメール：maf-syogaku@ynavi.jp 担当：中川真氏）へお願いします。

◆会員名簿発行に伴う情報提供のお願い

昨年度、会員名簿が発行されました。会員各位の諸項目の加筆修正や、ご知友の会員の情報提供をお願いします。その他の問合せや情報提供は、本会報一面の事務局（株）毎日学術フォーラム内Eメール：maf-syogaku@ynavi.jp 担当：中川真氏）へお願いします。

事務局（株）毎日学術フォーラム内）への電話でのお問い合わせにつきましては、政府の緊急事態宣言の発令を受けてのテレワークの導入に伴い、後日のご連絡となる場合がございます。
ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

新入会員紹介

事務局

◆一般会員

張莉（大阪教育大学）

劉曉琰（日本現代水墨研究所）

◆学生会員

玉素甫艾沙（広島大学大学院）

黒松愛華（筑波大学大学院）

沈伯陽（筑波大学大学院）

春田賢次朗（筑波大学大学院）

梁開印（大東文化大学大学院）

※令和元年11月上旬～令和2年4月に申請された方

視

点

「書きぶり」の捉え方

成田 健太郎

本会は、会則によれば「書学書道史とこれに関連する文化に関する研究の発展向上、国際交流の促進を図ることを目的とする」組織である。

「書学書道史」という語の定義は会則に記されず、各会員の学問的良心に委ねられているわけだが、どの会員も平たくいえば「書きぶり」という論点に関心を寄せながら研究を進めておられるのではないだろうか。

ところで、筆者は勤務校では中国古典を教えており、そこでも「書きぶり」ということを論点として大きく感じている。そして、中国古典文学の大きなジャンルとしては詩歌や小説もあるが、本来詩歌は「詠いぶり」が、小説は「語りぶり」が肝要であって、「書きぶり」が主要な見どころとなるジャンルはやはり散文である。書と文学を横断して論ずるとき、南朝における『詩品』・『書品』の存在や、「詩書画三絶」といったフレーズも手伝ってか、従来文学の側からは詩を取りあげることが多かったが、「書きぶり」を見定めるのであれば、散文こそ書の相手役にふさわしいのではないかと筆者は近ごろ考えている。

それにしても、散文の「書きぶり」はどのように捉えればよいのだろうか。そもそも、散文にその人なりの「書きぶり」を認めることができる条件はいかなるもので、その条件は歴史上どのように整えられてきたのだろうか。

古いところでは、先秦の諸子や漢の『史記』等の史書が散文の規範として著名である。諸子の著作は本来各学派が遊説した内容であり、その雄弁術が整理されて「書きぶり」に結晶したのかもしれない。一方『史記』は、伯夷列伝に「天道は是か非か」と嘆き、太史公自序に自身の悲劇を綴ったことで、史書としてだけではなく個人の著作としても意味を獲得した。「書きぶり」が定立する過程においても大きな役割を果たしたと思しい。

三国時代では、諸葛亮の「出師表」や嵇康の山濤に与えた「絶交書」が散文の名篇として知られる。ただし、不穏な社会状況に身を置いた彼らの散文は、「書きぶり」よりも、むしろ「生きざま」の表現として鑑賞されてきたのではないだろうか。そのことは上述の諸子や『史記』にも当てはまるのだが、要するに散文の傑作は、しばしば書き手の特別な思想の表出として光り輝くので、その「書きぶり」は見どころとして後景に退きやすい。これが散文の「書きぶり」を捉えようとするときジレンマとなる。

では東晋に下って、王羲之の「蘭亭序」はどうだろうか。古来散文の佳篇として名高いが、そこに綴られる春景への歓喜と推移への悲哀は、彼でなければ感知できない特別なものではなく、当時の江南貴族にあまねく共有された感傷であつたろう。つまり「蘭亭序」は、思想的な内容を漂わせながら、「書きぶり」をも見どころとして提示することに成功したのではないだろうか。そしてそのことは、「蘭亭序」が書の傑作として、すなわちもう一方の「書きぶり」の表現としても受容されるに至ったことと無関係ではないだろう。

以上のように浅い考えをめぐらしてみただけでも、書と散文の「書きぶり」が育まれてきた背景には共通のものがあるように思われる。今後、も微力ながら、書と文学の垣根を越えた研究を目指してゆきたい。

談話室

一般財団法人澄懷堂美術館リニューアル

井後 尚久

平成29年夏、勤務先である澄懷堂美術館は、創設（昭和32年）の地・四日市市水沢町に戻り、プレオープンを含めこれまで5回の美術館活動を行いました。そして、各方面の方々のご意見を拝聴し、館員全員の知恵を結集して、美術館全体のリニューアル計画に着手しました。

まず、令和元年11月末から美術館の内装外装を一新。令和2年1月からは庭や池の整備のほか、展示室に巨大な展示ケースを設置し、長期の展観に適した環境を調えることができました。

どうか皆様、是非弊館に足をお運び頂きます。ご意見・ご希望をお寄せくださいますようよろしくお願い申し上げます。展覧会などの情報は、弊館ホームページ（<https://chokaido.jp/>）をご覧ください。

珍短—その研究と収蔵

内田 誠一

明治後期から大正にかけての短冊ブームに、富裕層が参入したのが「珍短（珍稀な短冊）」蒐集熱の濫觴ではないか、と考えている。

珍短中の珍短は香川景新の短冊。明治44年刊の坂本桂治『競馬』では、坂本所蔵の景新と夫人風雪女の短冊が「どうだ」と言わんばかりに木版影印されている。

短冊嫌いの賀茂真淵や失明前の本居春庭等の有名な短冊に眼が行くのは当然として、景新や北村湖元、石金音主、水野学丹といった左程メジャーとは言えぬ人物の珍短を探すのは如何なる人か。それは、財を投じれば容易く購える短冊を数千数万と揃えた人ではないか。湖元を探す人は、季吟を既に所有している筈。

大蒐集家の代表格は武藤一郎（10万枚蒐集）に森繁夫（5万枚）。私も研究のために、珍短を幾葉か手許に置いては居るが、囊中の軽さに怯える身。御大尽の収蔵には及びもつかぬことだ。

晩春雑感

久保田 陽子

勤務先の岩手大学人文社会科学部は、今春、改組後に入学した書道学生を初めて送り出した。教育学部時代の専門性は残しつつ総合化を図る為、様々な研究分野の価値観を相対化し俯瞰的に捉えることを求められ、私は教養としての書のあり方について模索する毎日を送っている。分野の違う教員達と作り上げる授業が年に複数あり、自身の勉強不足と視野の狭さを痛感するが、想定外の課題が新たな視座を与えてくれる。書は、夫々の時代を懸命に生きる人々を理解する手掛

かりでもある。故に、学生にはその全体像や背景を包括的に掴んで欲しい。それが、書作や長い人生の糧になると信じている。折しも、世界的災禍に見舞われ平常が失われているが、後世の書道史の研究は私達の営みをどのように認識するのだろうか。引き続き、学生と共に視野を広げ苦境を乗り越えたい。

中国の「紹興論壇」に参加して

石 永峰

昨年5月、私は中国書法家協会主催の紹興論壇「王羲之与二王学構建」に参加することができた（詳細は、『書論』45号の拙稿「報告」を参照）。

中国における書法の創作と研究は、これまでの40年間に様々な探索を重ねており、その豊富な実績を承けて近年は「王羲之研究の再構築」をテーマに検討が進められている。特徴的な試みとして、書作と書学の連携を目指した展示会・講演会の併催、故宮博物院と中国国家図書館所蔵の王羲之法書の解説・展示が挙げられるが、そのなかで国際交流の更なる強化が図られていることも特筆される。中日両国の二王に関する主要論者が展覧され、また、新設された「二王学研究中心」の顧問には、王玉池氏、朱関田氏とともに本学会名誉会員・書論研究会会長の杉村邦彦氏が招聘された。

今後の日中書学交流の更なる発展が期待される。

編集後記

◆自宅待機の機会に資料を整理していたところ、書道史学会創立時期の記事が目に残りました。創立メンバーの熱いメッセージに触れ、思うところ考えるところ多く、今後より良い会報を作らねば、と思った次第です。（小川博章）

◆この度、事務局幹事・会報編集委員に再任しました。新体制で心機一転、微力ながら尽力して参りますので、何卒よろしくお願いいたします。（金子 馨）

◆「石敢當」は、災害や疫病を含めた「魔除け」の為に建立された。長野県南佐久郡には、亀田鵬齋と大窪詩仏の揮毫した石敢當がそれぞれ一基ずつ現存。鵬齋の石敢當は、埼玉県加須市にも一基ある。疫病退散、一日も早い収束を願っている。（亀田絵里香）

◆自宅に籠る生活が続く中、窓から見た春の植物に季節の移ろいを感じ、ふと安心しました。第16期もよろしくお願い致します。（野中直之）

◆新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、私たちの生活は一変しました。暗い話題が多い中、ドイツ政府が文化機関や文化施設の維持を最優先事項としたニュースが印象に残りました。

私も文化には社会を支える力があると信じています。日本の伝統文化である書に携わる者としてできることを考え、行動に移したいと考える毎日です。（藤森大雅）

◆今期より会報編集委員長となりました。ご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

勤務先の学生書展もウェブ開催となりました。6月22日〜7月末の予定です。「筑波書」で検索、ご覧いただけます。（尾川明穂）